

中 学 校

平成 2 7 年度

教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
1	主題設定の背景	
2	研究構想図	
II	研究仮説	3
III	研究の視点	3
IV	研究方法	4
V	研究内容	6
1	調査研究の結果	
2	実践的研究(1) 教材開発	
3	実践的研究(2) 検証授業	
	指導の過程の模式図	9
	【検証授業 1】	10
	【検証授業 2】	12
	【検証授業 3】	14
	【検証授業 4】	16
VI	分析と仮説の検証	18
VII	研究の成果	24
VIII	今後の課題	24

役割に着目した学級活動の工夫 ～「自己有用感」と「集団への所属感」を高めるために～

I 研究主題設定の理由

1 主題設定の背景

東京都教育ビジョンの基本理念には、『社会全体で子供の「知」「徳」「体」を育み、グローバル化の進展など変化の激しい時代における、自ら考え行動する力や社会の発展に貢献する力を培う。』とある。さらに、この基本理念を実現する視点として、「一人一人の個性や能力に着目し、最大限に伸ばすとともに、自己肯定感を高める。」と示されており、公共のために役立つ体験や社会貢献への意識、社会のルールやマナーを守る規範意識等を醸成させる過程の中で、自尊感情や自己肯定感を高める教育を推進していくことが求められている。

ここで、現代に生きる中学生の実態についてデータから分析したい。「全国学力・学習状況調査」(平成27年度)において、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」という質問に対して、93.6%の中学生が「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と答えている¹。一方で、「青少年の体験活動等に関する実態調査」報告書(平成24年度調査)によると、「今の自分が好きだ」という設問に対して、「とても思う」「少し思う」と答える子供の数は、小学4年生から中学2年生に向かって減少傾向にある²。このことから、生徒に「人の役に立つ人間になりたい」という思いがあり、そのような活動や体験をすることがあっても、自己有用感や自己肯定感に結び付けることができない状況にあることが考えられる。本研究で行った質問紙調査でも、同様の実態が確認された。この調査からは、「場面ごとの自分の役割(場面ごとの目的に合わせた行動)に気付くことができない」、「他者の役割への関心が薄い」、「役割を果たすことに対する自信がない」などの課題が明らかになった。

「中学校学習指導要領解説」には、特別活動の指導内容として、「体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの活動を充実する」と示されている³。話す、聞く、意見をまとめるなど、話し合いを進めるためには、司会だけでなく、話を聞く、発表するなどのその場の状況に合わせ、一人一人が様々な役割を果たすことが求められる。それらの役割を果たすことで、円滑に発表や話し合い活動は進展する。このことから、充実した言語活動は、集団の中で自分の役割を果たし、互いを認め合う活動であると言える。こうした言語活動を充実させることにより、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育成することができると考えられる。

そのため、本研究では、学級内の「役割」に注目した。生徒一人一人が学級での役割を理解するとともに役割を果たし、生徒同士の相互評価を含む学級活動が継続的に行われることにより、学級におけるよりよい生活づくりに参画することができると考えた。役割を果たすことによって自分自身が学級に貢献しているという意識が高まり、生徒一人一人の学級にお

¹ 文部科学省、「全国学力・学習状況調査【中学校】報告書」、平成27年

² 内閣府、「青少年の体験活動等に関する実態調査」報告書(平成24年度調査)」、平成26年

³ 文部科学省、「中学校学習指導要領解説 特別活動編」、平成20年

ける「自己有用感」と「集団への所属感」が相互に高まると考えられる。その結果、よりよい学級生活を送ろうとする自主的、実践的な態度が身に付くのではないか。

以上のことから、研究主題を「役割に着目した学級活動の工夫 ～「自己有用感」と「集団への所属感」を高めるために～」と設定した。

2 研究構想図

特別活動の目標

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

学級活動の目標

学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。

生徒の実態

◎学級生活をよりよいものにしていくための自主的、実践的な態度（自分から進んでみんなのために何かをしようとする態度）を育成する場が十分に確保されていない。

- 学級における役割を果たす場について、以下のような課題がある。
 - ・場面ごとの自分の役割（場面ごとの目的に合わせた行動）に気付くこと。
 - ・自分の役割に対して納得感をもつこと。
 - ・他者の役割にも関心をもつこと。
 - ・役割を果たすことに対して自信をもつこと。
- 学級における自己有用感を高めることについて、以下のような課題がある。
 - ・集団の中で役に立っている、人から感謝されている、認められているという実感をもつこと。
 - ・役割を果たしている生徒にも、学級集団に貢献できていること、仲間から感謝されていることを感じる場を設定すること。
- 学級の一員としての自覚をもたせることについて、以下のような課題がある。
 - ・仲間との関わりを通して、自分や仲間の存在に気付き、集団の一員としての自覚をもつこと。

身に付けさせたい力・目指す生徒像

- ◎よりよい生活（生徒一人一人が役割に気付き、学級のために役割を果たすことで、みんなが協力し、目標達成に向かえる生活）づくりに参画しようとする自主的・実践的な態度を身に付けた生徒
 - 集団における役割を理解し、役割を果たそうとする態度を身に付ける。
 - 自己有用感をもつ。
 - 集団の一員としての自覚（集団への所属感）をもつ。

研究主題

役割に着目した学級活動の工夫 ～「自己有用感」と「集団への所属感」を高めるために～

研究仮説

生徒一人一人が学級での役割を理解するとともに、役割を果たし、生徒同士の相互評価を含む学級活動が継続的に行われることにより、生徒一人一人の学級における「自己有用感」と「集団への所属感」が相互に高まり、学級におけるよりよい生活づくりに参画しようとする自主的、実践的な態度を身に付けることができるだろう。

II 研究仮説

生徒一人一人が学級での役割を理解するとともに、役割を果たし、生徒同士の相互評価を含む学級活動が継続的に行われることにより、生徒一人一人の学級における「自己有用感」と「集団への所属感」が相互に高まり、学級におけるよりよい生活づくりに参画しようとする自主的、実践的な態度を身に付けることができるだろう。

III 研究の視点

学級活動の目標は、「集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度」を育てることである。本研究では、生徒一人一人の学級での役割（場に応じた行動）に着目し、役割を果たそうとする態度を身に付けさせるための学級活動の授業実践と日々の学級における指導の在り方について研究した。また、本研究を通して、若手教員をはじめ、よりよい学級経営を目指す教員が、日々の指導に活用できる資料を作成することとした。

具体的には、合唱コンクールに向けた取組を題材とし、次の三つの視点から、研究を進めた。

1 自己の役割を理解し、納得して、自己決定ができるようにする指導の工夫

生徒一人一人の学級における「自己有用感」と「集団への所属感」を相互に高め、学級におけるよりよい生活づくりに参画しようとする自主的、実践的な態度を育てるために、生徒一人一人が自己の役割を自覚することが必要である。しかし、その役割が、自らの「よさ」を生かしくいもの、仕方なく引き受けたもの、集団としての目標達成に効果が見いだせないものであれば、自分の役割を果たしても、「自己有用感」やよりよい生活づくりに参画しようとする態度の育成につながらないことが考えられる。

そこで、一人一人の生徒が自分の役割を理解し、納得して、自己決定ができるようにするため、次の点に注目して研究を行った。

【「よさ」に気付く】

- ・自分の「よさ」を自覚することができる学級活動

【「よさ」を役割に生かす】

- ・所属する集団の共通の目標（例えば、「行事の成功」など）を決定することができる学級活動
- ・共通の目標を実現するために必要な役割を考えることができる学級活動

2 自分の役割に対する自己評価・他者評価の工夫

生徒一人一人の学級における「自己有用感」と「集団への所属感」を相互に高め、学級におけるよりよい生活づくりに参画しようとする自主的、実践的な態度を育てるために、自分が果たした役割について、他者からの肯定的な評価が得られるようにすることも大切である。所属する集団の取組に貢献することができているという意識は、まさに「自己有用感」と「集団への所属感」を高めることにつながるからである。

そこで、自己評価・他者評価の在り方を工夫するため、次の点に注目して研究を行った。

【役割を実践する】

- ・自己決定した役割を果たすことができる実践の場の設定
- ・集団の仲間が果たす役割に関心をもち、肯定的に評価することができる活動
- ・他者評価の具体的な手だてを理解することができる活動
- ・他者評価を受けて、果たした役割を自己評価し、文章で振り返ることができる活動

3 よりよい生活づくりに向けた授業実践と日常の取組

生徒一人一人の学級における「自己有用感」と「集団への所属感」を相互に高め、学級におけるよりよい生活づくりに参画しようとする自主的、実践的な態度を育てるために、実践の場を確保することが必要である。そこで、「自己有用感」や「集団への所属感」を意図的に高めるために、次の点に着目して、実践の場を工夫した。

【よりよい生活づくりに向けた授業実践】

- ・学級活動の授業実践…「よさ」の自覚、学級の目標決め、役割の自己決定、「認める・褒める」などの相互評価の手だての指導、相互評価を受けての振り返り

【日常の取組】

- ・よりよい生活づくりに向けた日常の取組…自己決定した役割の実践、相互評価の実施

生徒同士の相互評価の視点については、「生徒指導提要（文部科学省、平成22年）」から「ラポール⁴」の概念を援用した。生徒が学級における「自己有用感」を高めるためには、教師や周囲の友達との信頼関係が土台となる。『自信 やる気 確かな自我を育てるために』子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料【基礎編】（東京都教職員研修センター、平成23年）に示されるように、生徒が集団の中で信頼関係を形成するためには「認める・褒める」言葉掛けが重要である。そこで、本研究では「認める・褒める」言葉掛けを通じた「ラポール」の形成に着目した相互評価の方法を生徒に指導していく。

IV 研究方法

1 基礎研究

(1) 先行研究の調査

- ・「教育研究員研究報告書 中学校・特別活動」（平成26年度）

(2) 文献・資料による研究

- ・中学校学習指導要領
- ・中学校学習指導要領解説特別活動編（平成20年9月）
- ・「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校特別活動編）」（国立教育政策研究所 平成23年11月）

⁴ 臨床心理学の用語で、親密な信頼関係があり、心の通った状態にあること。

- ・「学級・学校文化を創る 特別活動（中学校編）」（文部科学省・国立教育政策研究所 平成 26 年 6 月）
- ・『『自信 やる気 確かな自我を育てるために』子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料【基礎編】』（平成 23 年 3 月）
- ・『『自信 やる気 確かな自我を育てるために』子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料【発展編】』（平成 24 年 3 月）
- ・「生徒指導リーフ「自尊感情」？それとも、「自己有用感」？」（文部科学省・国立教育政策研究所 平成 27 年 3 月）
- ・「日本の学級集団と学級経営」（河村茂雄 図書文化 平成 22 年）

2 調査研究

(1) 質問紙調査

下記調査の実施による生徒の実態把握とその分析

- ・「児童・生徒用自己評価シート（自尊感情測定尺度）」
- ・『『このクラスの一員でありたい』意識に関するアンケート（集団への所属感を測定）』

3 実践的研究

(1) 「自己有用感」と「集団への所属感」を高める教材開発

役割（場に応じた行動）に着目し、「自己有用感」と「集団への所属感」を高める指導法を検討し、指導計画と授業案を作成した。

(2) 検証授業

合唱コンクールを題材として、(1) に基づく検証授業を実施した。

(3) 効果の検証

2 (1) と同様の質問紙調査による生徒の実態把握と分析により 3 (2) の効果を検証する。

V 研究内容

1 調査研究の結果

事前の質問紙調査の結果は、事後の調査とともに「VI 分析と仮説の検証」の項で示す。

2 実践的研究(1) 教材開発

実践の場で果たした役割に対して、仲間からの肯定的な評価が得られることによって、その役割を更に果たそうとする意欲や、よりよい生活づくりに参画しようとする意欲を高めることにつながると考えている。しかし、生徒の実態として、仲間から感謝されることが少ないことは指摘したとおりである。自分や仲間が果たす役割に気づき、またそれに対する達成感や感謝、励ましの気持ちなどを伝える手だてについて考えた。

そこで、本研究では、「ラポールカード」を作成し、生徒の相互評価に用いた。

(1) ねらい

- ア 集団の仲間が果たす役割に関心をもつことができるようにする。
- イ 自分が果たした役割について、肯定的に評価することにより、生徒相互の望ましい人間関係が形成できるようにする。

(2) 使用にあたって

- ア 下の①～④の役割（場に応じた行動）について、「できた」と評価できる項目に○を付けさせる。「できていない」又は「わからない」場合には空欄のままにさせる。
- イ 「一日を振り返ってコメント」については、果たした役割やその人の「よさ」などについて、肯定的な内容のみを書かせる。
- ウ その日の「記入者氏名」を書かせ、本人（評価される人）に返させる。

☆ラポールカード☆

～仲間の「いいところ」を見つけよう！認めよう！伝えていこう！～

※ () 年 () 組 () 番 () の評価をお願いします！

	① 色々な場面であいさつができていた。	② 当番活動にきちんと取り組んだ。	③ 係や委員会の仕事にきちんと取り組んだ。	④ 係や委員会の仲間の指示を聞いて行動した。	⑤	⑥	⑦	⑧	記入者氏名	一日を振り返ってコメント ※いいことを書いてね！
月 日 ()										
月 日 ()										
月 日 ()										
月 日 ()										
月 日 ()										
月 日 ()										

班員のコメントを読んだ感想

・週の終わりなどには、仲間からの評価を踏まえて、感想を記入させる。

・その日に評価してくれる人にカードを渡すよう指導する。
・生活班などを一単位として、評価者を一日一人ずつ交代させる。

・自分の氏名（評価される人）を記入させる。

・実態に応じて、項目を増やしてもよい。

・「ラポール」の概念に基づき、否定的な内容は書かないよう指導する。

・その日に評価した人の氏名を記入させる。

○…できた
空欄…できていない
or わからない

3 実践的研究(2) 検証授業

(1) 題材 「合唱コンクールをみんなで成功させよう」

(2) 題材設定の理由

生徒一人一人の学級における「自己有用感」と「集団への所属感」を相互に高め、学級におけるよりよい生活づくりに参画しようとする自主的、実践的な態度を育てるために、まず一人一人が自己の役割を自覚することが大切である。そして、果たした役割について、仲間からの評価が得られることが必要である。特に所属する集団の仲間からの評価は、「自己有用感」と「集団への所属感」を高めることにつながると考える。

このことから、この活動では、行事に向けた取組を成功させるために果たすべき役割に気付かせるとともに、自分の「よさ」に注目し、納得して、役割を決めることができるようにする。また、自分の役割を果たすことで仲間からの評価につながり、「自己有用感」や「集団への所属感」が高まると考えた。そこで、本実践では、「合唱コンクールをみんなで成功させよう」という題材を設定した。

(3) 指導のねらい

ア 一人一人が役割を自覚するとともに、学級のために自分の役割を実践することで、仲間に認められ、「自己有用感」と「集団への所属感」を高めることができるようにする。

イ 学級や学校の一員として学級におけるよりよい生活づくりに参画しようとする自主的、実践的な態度を育成する。

(4) 評価規準

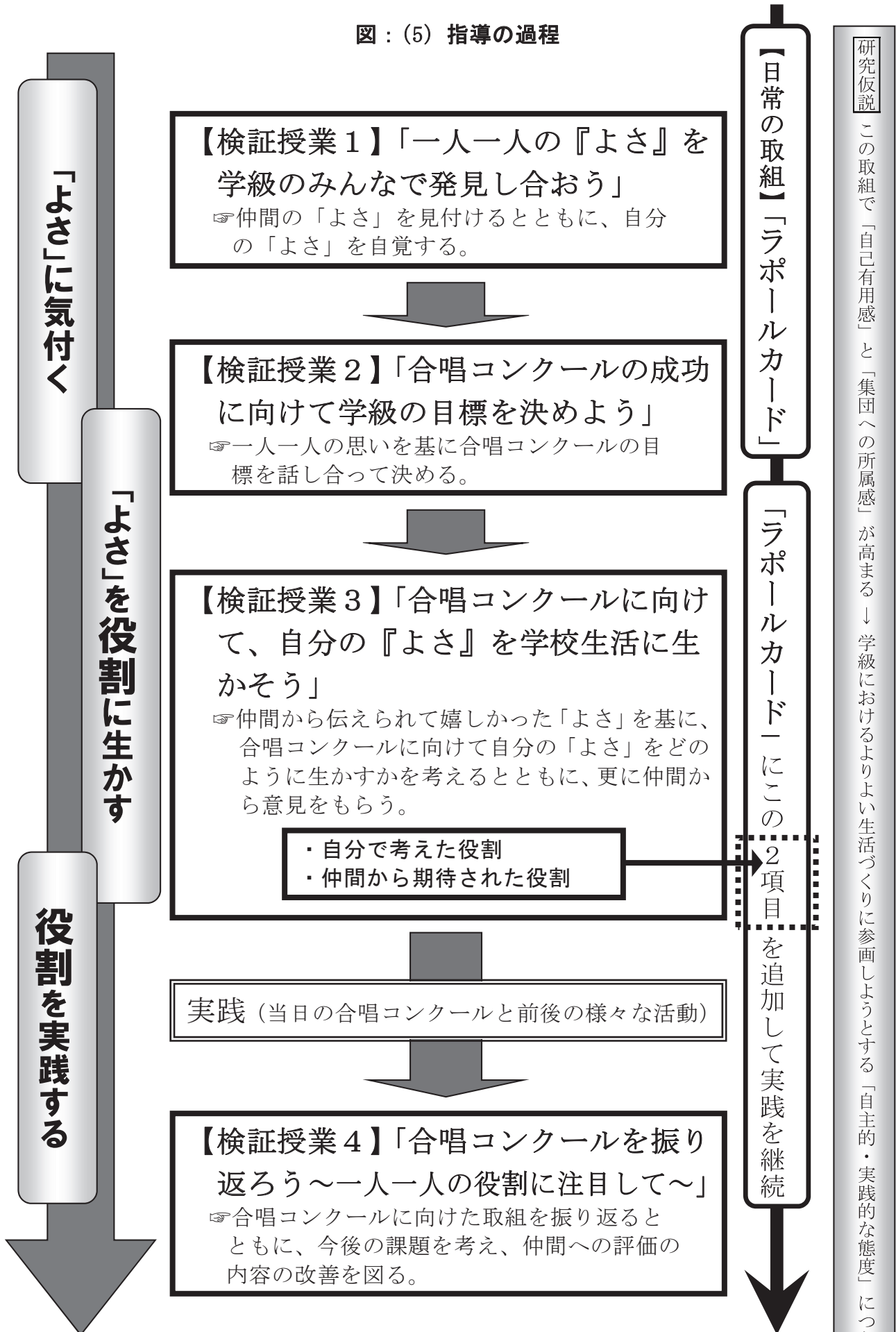
集団生活や生活への 関心・意欲・態度	集団や社会の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
学級の集団や自己の生活に関心をもち、望ましい人間関係を築きながら、積極的に集団活動や自己の生活の充実と向上に取り組もうとしている。	集団の一員としての役割を自覚し、望ましい人間関係を築きながら、集団活動や自己の生活の充実と向上について考え、判断し、自己を生かして実践している。	集団生活の意義、よりよい生活を築くために集団として意見をまとめる話し合い活動の仕方、自己の健全な生活の在り方などについて理解している。

(5) 指導の過程

時期	活動の内容	指導上の留意点	目指す生徒の姿と評価方法
9月 中旬	◇【検証授業1】 ・仲間の「よさ」を見付けるとともに、自分の「よさ」を自覚する。	・身体的「よさ」だけに注目させないようにする。 ・比較した結果を発表させることで、自分の「よさ」について考えることができるようにする。	【関心・意欲・態度】 ・仲間からの評価を、喜びや自信にして、よりよい生活づくりに向けて、自分の「よさ」を生かそうとしている。 [観察] [ワークシート]

10月 上旬	◇【検証授業2】 ・一人一人の思いを基に、合唱コンクールの目標を話し合っ て決定する。	・一人一人の思いを生かした目標を決めることができる話し合いになるよう助言する。	【思考・判断・実践】 ・一人一人の思いを生かしながら、自分の言葉で合唱コンクールの目標を表現している。 〔観察〕〔ワークシート〕
10月 上旬	◇【検証授業3】 ・仲間から伝えられて嬉しいと感じた「よさ」を基に、合唱コンクールに向けて自分の「よさ」をどのように生かすかを考えるとともに、更に仲間から意見をもらう。	・学校生活の具体的な場面を想定し、どのような「よさ」をどのように生かせるかを考えることができるようにする。 ・新たに記入した役割を含めて、「ラポールカード」の活用を通して、よりよい学級づくりを目指すことができるようにする。	【思考・判断・実践】 ・仲間から伝えられた自分の「よさ」を、学級での生活にどのように生かすことができるかを考えている。 〔観察〕〔ワークシート〕
10月 上旬	・一人一人が決めた役割を学級に掲示する。	・自他ともにいつでも役割を確認できるようにする。	
10月 中旬	・これまでの取組における集団での決定に基づいて、一人一人が役割を果たしながら活動する。	・一人一人が決めた役割を意識して、合唱コンクールに向けて取り組むことができるようにする。 ・仲間が果たす役割を認め合い、「ラポールカード」で称賛し合うことができるようにする。	
10月 下旬	◇合唱コンクール ・これまでの成果が実るよう、目標の実現に向けて活動する。	・これまでの取組を想起させ、生徒の活動意欲が高まるよう助言する。	
11月 上旬	◇【検証授業4】 ・合唱コンクールに向けた取組を振り返るとともに、今後の課題を考え、仲間への評価の内容の改善を図る。	・どんな結果であっても、「クラス目標」が達成できたことに触れる。その際、なぜ達成できたのかを考えさせることで、一人一人の役割に着目させる。 ・役割を果たすことで、学級におけるよりよい生活づくりにつながることを、一人一人が果たす役割を認め合うことで過ごしやすい学級になることを伝える。	【知識・理解】 ・仲間の役割に目を向け、一人一人が役割を果たすことで共通の目標が達成できることを理解している。 〔観察〕〔ワークシート〕

図：(5) 指導の過程



(6) 【検証授業1】 [実施日：平成27年9月14日]

① 本時の活動のテーマ

「一人一人の『よさ』を学級のみんなで見つけ合おう」⁵

(内容項目： (2) イ 自己及び他者の個性の理解と尊重)

② 本時のねらい

様々な場面において、自他の「よさ」に気づき合い、一人一人の「よさ」を生かして望ましい人間関係を築き、よりよい生活づくりを目指そうとする態度を育てる。

③ 本時の展開 表中の「※1~4」は、「④ 資料等」の吹き出しに対応している。

	活動の内容	指導上の留意点	目指す生徒の姿と評価方法
活動の開始 5分	1 本時の活動のねらいを知る。	・ワークシートと同じ形式で、教師自身の「よさ」について説明する。	
活動の展開 35分	2 自分の「よさ」を考え、ワークシートに記入する。 3 学級全員の仲間の「よさ」を、名簿に貼った付箋に記入する。 ※1 4 仲間のワークシートに付箋を貼っていく。※4	・書くことが苦手な生徒には具体例を出して助言する。 ・身体的な「よさ」だけに注目しないよう助言する。 ・書くことが苦手な生徒のためにヒントの表を作っておき、活用できるようにする。※2 ・書かれた付箋の枚数に偏りが出ないように、記入させる順番を工夫する。※3 ・班ごとや座席順など、学級の実態に合わせて移動の仕方を工夫する。	【知識・理解】 ・仲間の「よさ」に注目することで、互いの「よさ」を実感できることを理解している。 [観察] [付箋]
活動のまとめ 10分	5 自分が書いた自分の「よさ」と仲間に書いてもらった「よさ」とを比較する。 6 感想を記入する。	・比較した結果を発表させることで、改めて自分の「よさ」について考えることができるようにさせる。 ・自分の「よさ」を自覚し、これからの生活の中でその「よさ」を生かせるよう助言する。	【関心・意欲・態度】 ・仲間からの評価を喜びや自信にして、よりよい生活づくりのために自分の「よさ」を生かそうとしている。 [観察] [ワークシート]

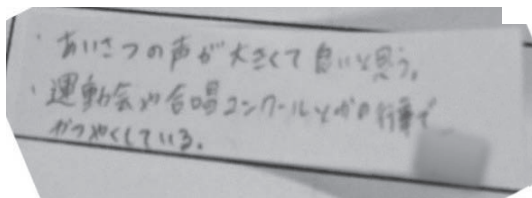
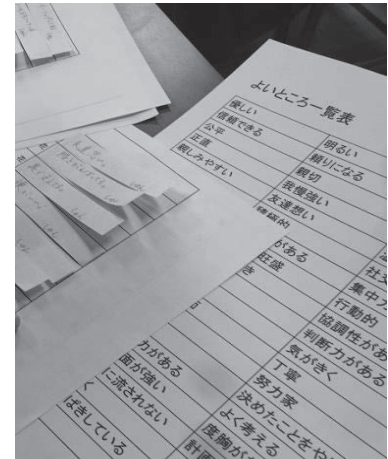
⁵ 本検証授業は、『『自信 やる気 確かな自我を育てるために』子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料【発展編】』を参考にして、改編したものである。

④ 資料等

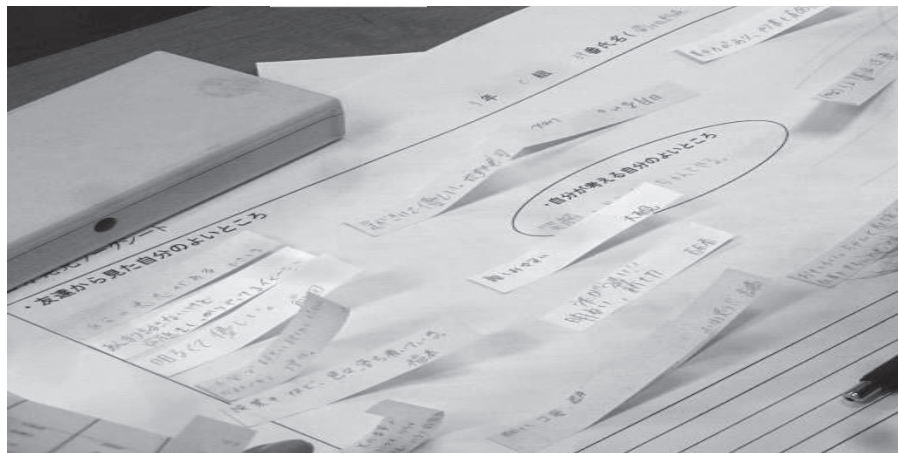
・名簿に付箋を貼り、仲間の「よさ」を記入させる。※1

・「よいところ」のヒントを一覧表にしておくことで、記入しやすくする。「運動会で声をかけていて『優しい』」など、具体的な事実と合わせて記入させるとよい。※2

・記入の順番は、「自分の出席番号の次の生徒から」などと工夫する。全員が出席番号1番の生徒から記入すると、出席番号が後半の生徒まで書き切れないことがある。特定の生徒が、貼られる付箋の枚数が少なくならないよう配慮する。※3



・誰が記入したか分かるように、自分の名前も書かせる。



・一人一人のワークシートに付箋を貼らせる。※4

⑤ 感想

- ・自分が考える自分の「よさ」を書くことに抵抗があり、なかなか書き始めることができない生徒が多くいた。「自己有用感」に課題があることと関係があると思われる。
- ・仲間の「よさ」に関しては、集中して記入していた。同性、異性関係なく、一人一人のことをよく考えて書くことができていた。
- ・ほとんどの生徒が、仲間から書いてもらった自分の「よさ」を嬉しそうに見ていた。翌日には担任や副担任の「よさ」も同じように付箋を使って書いていた。その行動は、仲間からの評価に対する喜びの表れだと思われる。

(7) 【検証授業2】 [実施日：平成27年10月2日]

① 本時の活動のテーマ

「合唱コンクールの成功に向けて学級の目標を決めよう」

(内容項目： (1) ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決)

② 本時のねらい

一人一人の思いを確認しながら合唱コンクールの目標を作り、合唱コンクールを成功させようという態度を育てる。

③ 本時の展開

	活動の内容	指導上の留意点	目指す生徒の姿と評価方法
活動の開始 5分	1 本時の議題とねらいを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ形式の座席配置にする。 ・司会は生徒に行わせる。司会が進行に困った場合は助言する。 ・議題を板書させる。 ・一人一人の思いを生かして目標を決められるような話合いになるよう助言する。 	
活動の展開 40分	2 話合い (1) 理想のゴール（合唱コンクール終了後直後の気持ち）について話し合う。 (2) (1)を踏まえた学級全体のゴール（目標）について話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分の理想のゴール」は、事前に記入させておく。 ・班ごとに、一人一人の意見を交流できるようにする。 ・肯定的に仲間の意見を受け止めるよう助言する。 ・「やってみたい」と思える目標を考えるよう助言する。 ・意見が書けない生徒には助言する。 ・生活班（又は二人1組）で、目標を発表し合い、一つの目標を決定するとともに、決定した目標を黒板に書き出させる。 ・進行状況を見ながら、その後の進め方を司会に助言する。 ・「目標を意識して活動するとともに、一生懸命取り組もうという気持ちになれるか」など、確認しながら目標が決められるようにする。 ・発表者が発表しやすい環境になるよう、聞き手の姿勢について指導する。 	【思考・判断・実践】 ・一人一人の思いを生かしながら、自分の言葉で合唱コンクールの目標を表現している。 [観察] [ワークシート]

活動のまとめ 5分	3 決定事項を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の思いが目標に入っていることを再確認させる。 ・協力して学級の生徒に感謝の気持ちを伝えるよう指導する。 	
	4 司会の話聞く。		
	5 自己評価を記入する。	<ul style="list-style-type: none"> ・共通の目標を達成するために、一人一人の「よさ」を生かしたり、自分の役割を果たしたりすることが大切であることを伝える。 	
	6 教師の話聞く。		

④ 資料等

ワークシート「学級の目標を考えるために」

① 理想のゴール 「合唱コンクールが終わった直後の気持ちを考えよう」

自分の理想のゴール

みんなの意見

② 学級全体のゴール 「合唱コンクールが終わったクラス全員で達成したいこと」

自分が考える学級全体の目標

目標のチェック

- 目標の意味が分かりやすい。
- 「みんなでできているか、できていないか」ということが判断しやすい。
- 実現できそうか。みんなにとって挑戦したい内容になっているか。
- 目標を思い返した時、自分やみんなの意見を思い出すことができるか。

③ 今日の活動を振り返って

(8) 【検証授業3】 [実施日：平成27年10月8日]

① 本時の活動のテーマ

「合唱コンクールに向けて、自分の「よさ」を学校生活に生かそう」

(内容項目： (2) イ 自己及び他者の個性の理解と尊重)

② 本時のねらい

- ・ 合唱コンクールに向けて、日常の生活のどのような場面で仲間の「よさ」を生かせるかを考えることができるようにする。
- ・ 合唱コンクールに向けて、日常の生活のどのような場面で自分の「よさ」を生かせるかを考え、自分の「よさ」を生かそうとすることができるようにする。

③ 本時の展開 表中の「※1~3」は、「④ 資料等」の吹き出しに対応している。

	活動の内容	指導上の留意点	目指す生徒の姿と評価方法
活動の開始 5分	1 前回の授業と「ラポールカード」を始めてからの3週間を振り返りながら、本時の活動のねらいを知る。		
活動の展開 35分	2 「自分の『よさ』を生かそうシート」の1・2を記入し、自分の「よさ」を生かせる場面を考える。 3 仲間の「よさ」を生かせる場面について、班で話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校生活の具体的な場面を想定し、どのような「よさ」をどのように生かせるかを考えることができるようにする。※1 ・ 具体的な場面と「よさ」の生かし方を例示してから考えることができるようにする。※2 ・ 司会、記録、聞き手の姿勢など、話し合い活動における役割について意識させる。 ・ 話し合いが進まないグループには助言をする。 ・ 話し合いの過程や結果を記録する係を設ける場合には、記入の仕方を指示しておく。 	<p>【思考・判断・実践】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の「よさ」を学級でどのように生かすことができるかを考えている。 <p>[観察] [ワークシート]</p> <p>【思考・判断・実践】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 仲間の「よさ」を学級での生活にどのように生かすことができるかを考えている。 <p>[観察] [ワークシート]</p>
活動のまとめ 5分	4 「ラポールカード」に自分で決めた役割を記入する。 5 今後の学級での生活について、教師の話聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 掲示用カードにも記入させて掲示することで、学級全体に一人一人の役割が見えるようにする。※3 ・ 新たに記入した役割も含めて、「ラポールカード」を続けながら、よりよい学級づくりを目指していくことを伝える。 	

④ 資料等

自分のよさを生かそうシート

2年4組 番 名前

Q1, みんなに書いてもらった自分の「よいところ」から、嬉しかったものを選んで書こう。(複数でもよい)

Q2, 1で選んだ自分のよさの中から、合唱コンクール(4組が最高のかたちで終えるため)に向けて、日常のどんな場面でどのように生かせるか考えよう。
※ラポールカードの5項目めになります

① の場面で

自分の ところを

③ する。
に生かす。

Q3, 自分のよさをどんな場面で、どのように生かすことができるか、班の人と話し合おう。
※ラポールカード6項目めになります

① の場面で

自分の ところを

③ する。
に生かす。

・ 検証授業(1)で実施した付箋に書かれた「よさ」を中心に記入させる。

・ 合唱コンクールの練習に限らず、給食や休み時間、当番活動、友人関係など、日常生活全般について記入させてもよい。

①「よさ」が生かしくい場面を書いている場合は、場面を再度検討させる。

②Q1で記入した「よさ」から選んで記入させる。

③具体的に記述するよう助言する。
(Q3同様) ※1

・ 掲示用カードの例。この生徒は、「声大きい」という「よさ」を、「練習や注意するとき」という場面を設定し、「聞いてもらえるようにする」と具体的な表現で記述している。 ※3

・ 記入例を示しておく。 ※2

⑤ 感想

- ・ 自分たちで考えた項目を「ラポールカード」に追加することで、自分の「よさ」や仲間の「よさ」を意識して学校生活を送ることができるようになった。
- ・ 自分の「よさ」に気付くだけでなく、その「よさ」を学級のためにどのように生かすことができるかを考えることによって、自分が学級に必要とされていることを実感することができるようになることから、「自己有用感」や「集団への所属感」が形成されることが期待される。
- ・ 自分の「よさ」を仲間から伝えられても、そのことを自覚しない場合、それ以上の活動を続けることができない生徒もいた。

(9) 【検証授業4】 [実施日：平成27年10月30日]

① 本時の活動のテーマ

「合唱コンクールを振り返ろう～一人一人の役割に注目して～」

(内容項目：(2)ウ 社会の一員としての自覚と責任)

② 指導のねらい

合唱コンクールの振り返りを通じて、一人一人の役割を果たすことによって共通の目標が達成できることを実感できるようにし、今後の学校生活に生かそうとする態度を育てる。

③ 本時の展開 表中の「※1～3」は、「④ 資料等」の吹き出しに対応している。

	活動の内容	指導上の留意点	目指す生徒の姿と評価方法
活動の開始 10分	1 合唱コンクールのビデオを観て、自分や仲間の取組を振り返る。	・本番の緊張感、歌い終わったときの思い、結果発表のときの気持ち等を振り返らせる。	
活動の展開 30分	2 「合唱コンクール振り返りシート」を活用し、学級の目標を達成するために、自分の役割を果たすことができたかを自己評価する。※1 3 班の仲間の取組について、それぞれの役割に注目し、感謝の言葉を書く。※2 4 班の座席配置に替え、互いに感謝の言葉を伝え合う。	・合唱コンクールの「クラス目標」と「個人目標」を掲示し、振り返りの視点を示す。 ・どんな結果であっても、「クラス目標」が達成できたことに触れる。その際、なぜ達成できたのかを考えさせることで、役割に着目させる。 ・役割に注目したことが分かるように、感謝の言葉を書くよう助言する。	【知識・理解】 ・班の仲間の役割に着目し、一人一人が役割を果たすことで共通の目標が達成できることを理解している。 [観察] [ワークシート]
活動のまとめ 10分	5 役割に注目した一連の取組について振り返り、今後の学校生活の目標を記入する。※3	・役割を果たすことで、学級におけるよりよい生活づくりにつながる、一人一人が果たす役割を認め合うことで過ごしやすい学級になることを伝える。	【関心・意欲・態度】 ・学級の一員として、自分の役割を果たすことで学級におけるよりよい生活づくりを目指そうとしている。 [ワークシート]

④ 資料等

合唱コンクール振り返りシート

年 組 番氏名 ()

合唱コンクールが終わりました。これまでの活動を思い出しながら、それぞれの「役割」に注目して、振り返ってみよう。

1. 合唱コンクールに向けた取り組みで、クラスの目標を達成するために、自分の役割を果たすことができましたか。

自分の役割	達成度	
	できた	できなかった
	4	5
	2	1

2. 今回の合唱コンクールの取り組みで、ともにがんばった班のみんなの「役割」に注目し、感謝の言葉を書いてみよう。

^	
^	
^	
^	
^	
^	
^	

3. 合唱コンクールの取り組みを振り返り、これからの生活で、よりよいクラスをつくっていくために大切なことは何か考えてみよう。

・「ラポールカード」や掲示用カードに記入した自分の役割について自己評価する。

・なぜその達成度だと判断したのか記入させると、役割への着目があるかを見取ることができる。

※1

・班の仲間の役割に注目して記入するよう助言する。

・評価し合う相手は、実態に応じて変更してもよい。例えば、パートごとに行ってもよい。 ※2

・今後の目標を考えさせる。役割に着目できるよう助言することが大切である。

※3

⑤ 感想

- ・ 自己評価では、練習を含めた全体の取組ではなく、本番当日の結果だけで判断する生徒もいた。例えば、伴奏者を務めた生徒は、途中で演奏が止まってしまったことで、自己評価を「1」にしていた。しかし、班の仲間から感謝の言葉を掛けられたこともあり、事後の質問紙調査では「自己有用感」も「集団への所属感」もともに上昇していた。
- ・ 実行委員や指揮者、伴奏者など、役割が具体的な生徒ほど、仲間から良い評価をされていた。そのため、事後の質問紙調査でも、ほとんどの生徒の数値が上昇していた。
- ・ 合唱コンクールだけではなく、その他の行事や日常の学級における生活でも、自他が認めた上で役割を決め、その役割を果たし、仲間から評価を得る取組を行うことで、より多くの生徒の「自己有用感」と「集団への所属感」を高めることができるのではないかと。

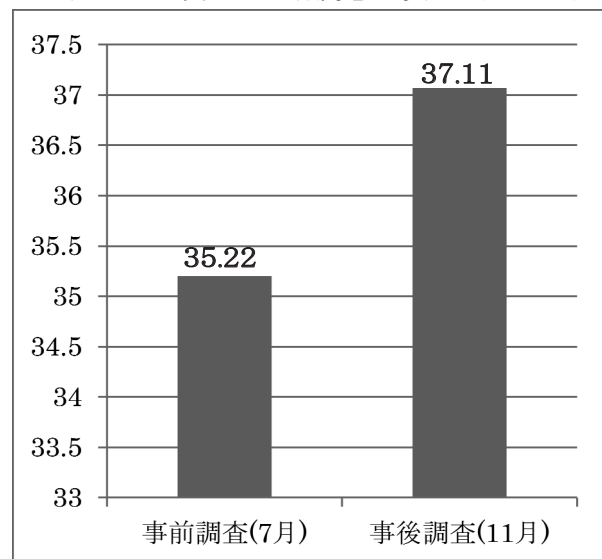
VI 分析と仮説の検証

1 量的観点から

(1) 集団への所属感の変化

集団への所属感は、『このクラスの一員でありたい』意識に関するアンケート⁶を用いて測定した。事前調査時（7月）と事後調査時（11月）それぞれの平均値を出し、比較した。その結果、対象とする生徒集団（n=179）において、35.22から37.11への上昇が認められた（グラフ1）。この二つの平均値の差（数値の上昇値）が「一部の値の上昇によってではなく、全体的な値の上昇によって生じたものか否か」を判断するため、統計処理ソフトを用い、対応のある t 検定⁷を実施した結果、事後調査の平均値の方が、事前調査の平均値に比べて有意に大きいことが分かった（ $p < 0.05$ ）。つまり、7月から11月にかけての値の変化は、統計的に見て全体的に上昇傾向にあり、集団への所属感全体として高まったと判断することができる。

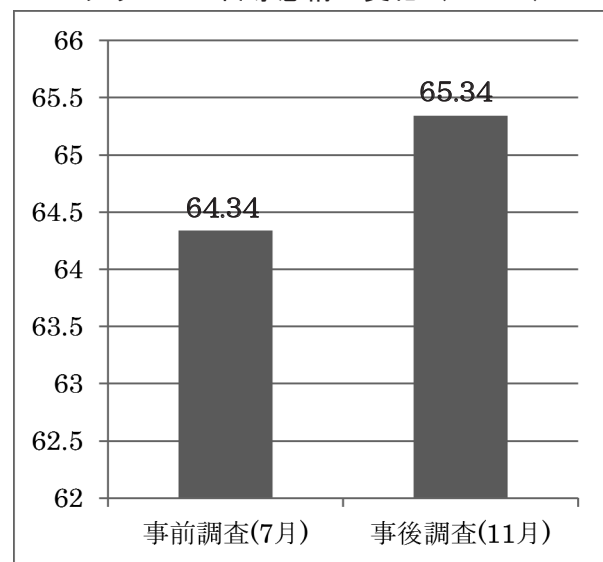
グラフ1 集団への所属感の変化（n=179）



(2) 自己有用感の変化

ア 自己有用感は「自尊感情測定尺度」（東京都教職員研修センター 平成22年）を用いて測定した。事前調査時（7月）と事後調査時（11月）それぞれの平均値を出し、比較した。その結果、対象とする生徒集団（n=174）において、64.34から65.34への上昇が認められた⁸（グラフ2）。この二つの平均値の差について、対応のある t 検定を実施したところ、事後調査の平均値の方が、事前調査の平均値に比べて有意に大きいということが分かった（ $p < 0.05$ ）。このことから、7月から11月にかけて、自尊感情は、わずかではあるが全体として高まったと判断することができる。

グラフ2 自尊感情の変化（n=174）



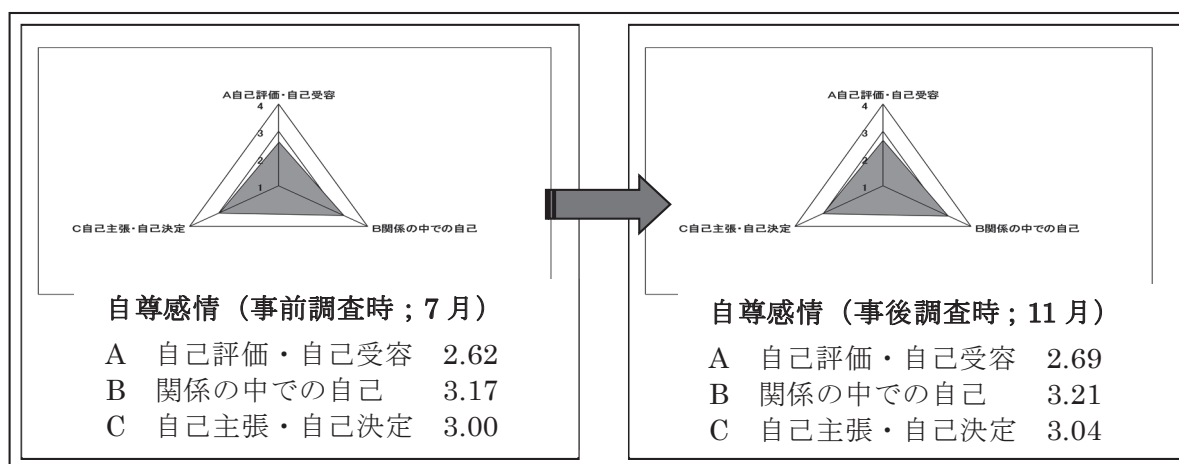
⁶ 本研究でいう「集団への所属感」を測る心理尺度として、それに近い心理傾向を測る「集団同一視尺度（唐沢、1991）」を採用する。

⁷ 2つのグループの平均の差が偶然や誤差の範囲内にあるかどうかを調べる統計手法。

⁸ 「自尊感情測定尺度」は反転項目を含む22問（4件法）で構成され、3つの下位尺度「A：自己評価・自己受容」、
「B：関係の中での自己」、
「C：自己主張・自己決定」が含まれる。ここでは「自尊感情」の総体の変化を調べるため、下位尺度ごとに分割せず、全ての回答の値を合算して出している（反転処理後）。

イ 東京都教職員研修センターの Web サイトからダウンロードした「レーダーチャート」を用い、自尊感情の下位尺度ごとの合計値を 4 点満点に調整して図のように示した (図 1)。

図 1 下位尺度ごとに見た自尊感情の変化

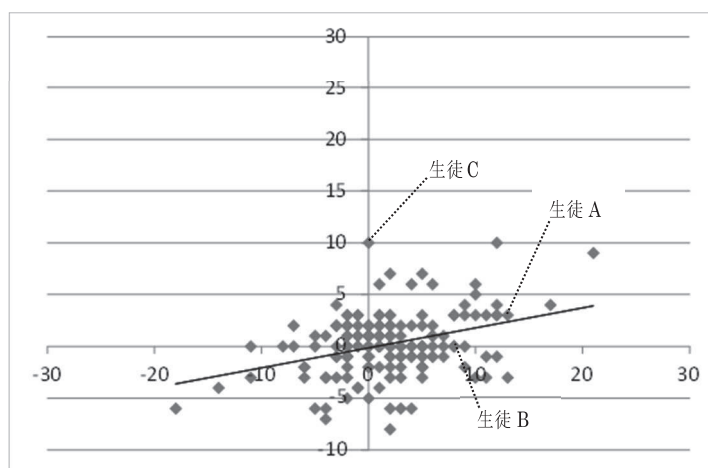


(3) 集団への所属感と自尊感情の関連性

ア 本研究の仮説の前半部は、「生徒一人一人が役割を理解し、遂行するとともに、生徒同士の相互評価を含む学級活動を継続的に行うことによって『自己有用感』と『集団への所属感』が相互に高まる」である。仮説が正しければ、研究に係る実践後の自尊感情の各下位尺度 A・B・C の上昇値と集団への所属感の上昇値との間には、何らかの相関があると考えられる。

イ ここで、自尊感情の各下位尺度 A・B・C の上昇値と集団への所属感の上昇値との間で相関分析⁹を行った。結果、A・B・C の値の変化全てと、集団への所属感の値の変化には、弱い正の相関が認められた。その中で比較的強い相関となったのが、下位尺度 B「関係の中での自己」との相関¹⁰である (グラフ 3)。右のグラフの中の第 1 象限に存在するポイントが集団への所属感と自尊感情の値がともに高まった生徒である。

グラフ 3 散布図
(x 軸：集団への所属感の値の変化、y 軸：下位尺度 B の値の変化)



※グラフ中の生徒 A・B・C については後述

2 質的観点から

(1) 抽出生徒を選定する際の基準

⁹ 二つの変数間の関係を数値で記述する統計手法。

¹⁰ 相関係数 $r=0.35$ 、 $p<0.05$

前述の分析からは、集団への所属感と自尊感情の値は相関の関係にあるものの、強い相関があるとは言い切れない。

そこで、両方の数値が上昇している生徒に加え、どちらか一方の数値が上昇している生徒を抽出に、別の視点から成果の分析を行うこととした。ここでは紙面の都合上、特徴的傾向を示す3人の生徒（前項「グラフ3」中の生徒A・B・C）の他、若干名の記述を基に分析することとする。

- (2) 集団への所属感と自尊感情の値が共に上昇した生徒の記述とその分析（生徒A：集団への所属感+13、自尊感情+3）

【「ラポールカード」の記述 1/3】

班員のコメントを読んだ感想

結構、みんな、発言やあいさつのことなどを書いていた人が多かったので、そこは続けていきたいと思いました。また、活動や行動のことがあまりなかったので、そこは頑張りたいと思いました。

上は、「ラポールカード」に書かれた生徒Aの記述である。班の仲間からは「テキパキ行動していた」、「大きな声であいさつができていてよかった」などと書かれており、それに対して本人は「結構、みんな、発言やあいさつのことなどを書いていた人が多かったので、そこは続けていきたいと思いました。」と記述している。また、「活動や行動のことがあまりなかったので、そこは頑張りたいと思いました。」というように、反省と今後の目標についても記述している。

【「ラポールカード」の記述 2/3】

班員のコメントを読んだ感想

みんな、行動などのことを書いていたので、行動はちゃんとできていたんだなーと思いました。

上は、その一週間後のコメントである。班の仲間からは、「英語のときの発音がうまかった」、「机の中を教科ごとに分けていていいと思いました」などと、具体的な行動に関するコメントが記述されている。それに対するAの記述を見ると、一週間前の振り返りを意識して生活していることが分かる。

【「ラポールカード」の記述 3/3】

班員のコメントを読んだ感想

大きな声で歌っていると、行動が速いとか、目標のことが書いてあったのでうれしかった。（目標が達成できてうれしかった。）

上は、更にその一週間後のコメントである。ここから、カードに新たな評価項目が加わる。それは、仲間によって書かれて嬉しかった「よさ」を基にして、個々の生徒が考えた合唱コンクールの練習で自分が学級のために果たすべき役割である。Aは、「大きな声で歌う」、「パート練習のときに注意する」というように自分の果たすべき役割を設定している。記述を見ると、「うれしかった」と2回記述していることから、自分の役割について仲間が評価してくれたことを素直に喜んでいる様子が伝わる。

【「合唱コンクール振り返りシート」の記述】

班員のコメントを読んだ感想

合唱コンでのみんなの集まりやすぐに静かになるなどの行動をクラスでの集団生活で生かしていく。（先生が前に立ったりする朝礼のときなど）

最後に示すのは、合唱コンクールが終わった後、役割に注目して行った振り返りのワークシートの記述である。Aは、「役割の理解と遂行」、「生徒同士の相互評価」という一連の学級活動を経て、上のような記述をしている。「クラスでの集団生活で生かしていく」という記述からは、本研究の仮説の後半部の「学級におけるよりよい生活づくりに参画しようとする自主的、実践的な態度」が現れたものということができる。つまり、Aは、生徒の相互評価の中で見えてきた自分の「よさ」から自分の役割を考えて実践し、仲間から肯定的に評価されることにより、集団への所属感と自尊感情を共に高めることができたと考えられる。また、そのことが主体的に集団生活へ参画しようとする態度につながったと想定される。

- (3) 集団への所属感の値のみ上昇した生徒の記述とその分析（生徒 B：集団への所属感+8、自尊感情+0）

【「自分発見ワークシート」の記述】

○自分発見ワークシート 年 組 番氏名 ()

・友達から見た自分のよいところ。

優しく、気がきく

字がきれい、話しかけやすい

頼りがいがある

意志が強い

字がきれい、話しかけやすい

好奇心旺盛

努力家、丁寧

先生から頼られている

社交的で誰にでも優しく、クラスを引っ張ってくれる

判断力があり、堂々としている

・自分が考える自分のよいところ。

好きなことは全力で頑張る

・気づいたこと。

. . .

. . .

. . .

たくさんの人が「明るい」って書いてくれていて、これからも明るく元気に過ごそうと思います。
「頼りがいがある」、「引っ張ってくれる」と書いてくれていて、自分では分からないことを書いてもらえて嬉しい(^o^)

上は、学級の仲間全員から自分の「よさ」を書いてもらう学級活動を実施した際に用いた生徒 B の「自分発見ワークシート」である。「気づいたこと」欄に B の感想が書かれている。ここには、「自分では分からないことを書いてもらえて嬉しい」と書かれている。

【「ラポールカード」の記述 1/3、2/3、3/3】

班員のコメントを読んだ感想
これからも当番をしっかりやったり、あいさつをしていこうと思う。

班員のコメントを読んだ感想
全部「○」がついていてよかった(^o^) 来週も頑張ろうと思う。

班員のコメントを読んだ感想
全部〇でよかった！これからも続けようと思う(^o^)

上の三つは、「ラポールカード」の記述である。Bは班の仲間から「あいさつをきちんとしていた。当番活動もきちんとやっていた」、「字がとてもきれいで、授業をしっかり受けていた」などといったコメントをもらっている。Bが様々な役割についてよく理解し、取り組んでいたこと、そしてそれを班の仲間も肯定的に評価していたことが分かる。特に3番目の「ラポールカード」には、Bが設定した合唱コンクールに向けた自分の役割である「声掛け、みんなを引っ張る」、「練習の場面で自分の親しみやすいところを生かし、クラスみんなで協力できるよう声掛けをする」と書かれている。

【「合唱コンクール振り返りシート」の記述 1/2、2/2】

時にぶつかったり、時に上手くいったり、この2週間いろいろなことがあったけれど、話し合ったりして乗り越えてきたので、一人一人意見を持ち、協力し、気を配れば良いクラスができると思う！

上は、合唱コンクールが終わった後、役割に注目して行った振り返りのワークシートの記述である。合唱コンクールまでの様々な取組を振り返り、今後の学級での生活をよりよいものにしていくための目標が書かれている。また、Bは同じワークシートで、仲間に対する

田中くん へ	「大きな声で歌う」「元気な声で歌う」という目標どおり、隣で歌っていて、元気で大きな声が聞こえてきて良かった。
青木くん へ	「落ち着いてしっかり歌う」という目標どおり、落ち着いていた。
星野さん へ	「まわりのふざけている人を注意」をしていた。 頑張って歌っていた。
服部さん へ	色々あったけど、ちゃんと歌ってくれた。 声が大きくて良かった。

評価もとても丁寧に行っており（右上）、一人一人の「よさ」をよく捉えていることが分かる。Bに限らず、仲間の「よさ」に多く気づき、多くの視点から仲間を評価する生徒は、仲間からも同様の評価を得やすい傾向にあることが分かった。つまり、集団への所属感や自己有用感が高まるような前向きな評価を得るためには、集団内において、前向きに、かつ丁寧に仲間を評価していこうとする態度を身に付けさせることが大切であると言える。これは、相互評価が「双方向性」のものである点に理由があると考えられる。相互評価の質を高めるためには、教師は、生徒の行動面の変化を促すだけでなく、仲間に対する評価についても具体的な視点を示すなどの指導を行う必要があると示唆される。

(4) 自尊感情の値のみ上昇した生徒の記述とその分析

ア 自尊感情の値が上昇した生徒C・D・E・F・Gの記述を示す。自尊感情の値が上昇した生徒の中には文章がより具体的に書いている生徒が比較的多くいたため、複数名示す。

① 生徒C：集団への所属感+0、自尊感情+10

【「自分発見ワークシート」と「ラポールカード」の記述】

・気づいたこと
「ひかえめ」という言葉が多かった。「やさしい」や「友達想い」という言葉があつてうれしかった。
みんなが書いてくれたよいところを生かしてこれからもよいところを増やしていきたいです。

班員のコメントを読んだ感想

「授業をちゃんと受けていた」、「これからもファイト」というコメントがあってうれしかった。
もっと勉強をがんばろうと思った。

② 生徒 D：集団への所属感-3、自尊感情+2

【「ラポールカード」の記述】

班員のコメントを読んだ感想

いいことがたくさん書かれていたのでうれしい。
今度から係の仕事をがんばろうと思った。

③ 生徒 E：集団への所属感+0、自尊感情+1

【「ラポールカード」の振り返り記述】

班員のコメントを読んだ感想

がんばっていたことがほめられているかんじで、少しはずかしい。 でもめっちゃうれしい。

④ 生徒 F：集団への所属感+0、自尊感情+1

【「ラポールカード」の振り返り記述】

班員のコメントを読んだ感想

自分のいいところが書かれていて、今までラポールカードみたいなのはやったことがなかったから、
ちゃんとできているところが自分で分かって、いい気持ちになった。

⑤ 生徒 G：集団への所属感+0、自尊感情+1

【「ラポールカード」の振り返り記述】

班員のコメントを読んだ感想

実行委員のこととかで、いいコメントがたくさんあって
すごうれしかったし、やりがいを感じた。

イ アで示した C~G は、いずれも自尊感情の数値が上昇した生徒である。これらの記述を分析すると、共通する要素を見付けることができる。それは、仲間から評価されたことに対する喜びの表現である。C の 2 番目の記述を見ると、「授業をちゃんと受けていた」という評価が「もっと勉強をがんばろうと思った」という記述にあるように、主体的な向上・変容につながっていることが伺える。また、D は、仲間からの肯定的な評価を受けて「今度から係の仕事をがんばろうと思った」と書いており、まさに「学級におけるよりよい生活づくりに参画しようとする自主的、実践的な態度」につながる変容が見られる。これらの記述が見られる時期は生徒によって様々である。しかし、多くの生徒が仲間との相互評価を通し、自己有用感を高めていること、また、今後の学級生活に向けた目標を記述していることが分かる。

3 分析を踏まえて言えること

本研究の仮説は以下のとおりである。

生徒一人一人が学級での役割を理解するとともに、役割を果たし、生徒同士の相互評価を含む学級活動が継続的に行われることにより、生徒一人一人の学級における「自己有用感」と「集団への所属感」が相互に高まり、学級におけるよりよい生活づくりに参画しようとする自主的、実践的な態度を身に付けることができるだろう。

これまでの分析から、「生徒一人一人が学級での役割を理解するとともに役割を果たす」と「生徒同士の相互評価を含む継続的な学級活動」により、生徒全体の「自己有用感」と「集団への所属感」は相互に高まったといえることができる。それは、両者の間にある量的な相関関係に加え、どちらか一方でも数値が上昇した生徒の記述に「役割を果たそうとする意欲」や「自分のよさが認められて嬉しい気持ち」、「学級への愛着や思い入れ」が多く読みとれたという質的な分析の結果からも言える。また、決して多くはないが、今後の学級への関わり方をよりよいものにしていくという目標を書いた生徒もいる。これは、自主的、実践的な態度へとつながる萌芽であるとも考えられる。よって、本研究の仮説は大部分において実証されたと考える。

Ⅶ 研究の成果

- 1 「役割を理解し、果たすこと」とそれを「仲間同士で評価し合い、感謝し合うこと」を継続的に指導することが、生徒の「自己有用感」と「集団への所属感」を高める上で有効な手だてであることが分かった。
- 2 生徒の「自己有用感」と「集団への所属感」を高めることが、生徒の「自主的、実践的な態度」の形成につながる重要な要素であることが分かった。
- 3 本研究に係る実践を通して、生徒が「自己有用感」と「集団への所属感」を高め、よりよい学級生活を実現するための具体的な目標をもち、内面的な成長を遂げることができた。

Ⅷ 研究の課題

- 1 活動への積極的な参加が難しい生徒への支援の方法を具体的に考える必要がある。
- 2 本研究で取り上げた合唱コンクールのように、学級全体の目標を定めやすい活動の場合、役割を意識させ、実践していくことは難しくない。しかし、教育課程全体に占める学校行事の割合を考えれば、日常生活の中でできる取組を考え、実践していくことが重要である。
- 3 生徒の内面の変容を把握する適正な評価の在り方を検討する必要がある。中学生の発達段階を考えると、同一の生徒でも、自他に対する内的な評価規準が次々に変わっていくと推測される。そのため、単一の質問紙で内面の変容を見取ることは難しいのではないか。
- 4 書いたり、話したりすることに不慣れな生徒の場合、考えや思いを適正に表現することができず、取組や手だての効果測定が難しい。日々の教育活動全般にわたり、言語活動を取り入れ、生徒の言語力を高めていくことの重要性が示唆される。
- 5 思春期という発達段階は「自分のことが見え始める」時期であり、他者からの評価が気になる時期である。そのため、「よさ」のみに着目する「ラポール」の関わりには限界があると思われる。「(前向きに) 課題を指摘する」などの相互評価も必要ではないか。

平成27年度 教育研究員名簿

中 学 校 ・ 特 別 活 動 部 会

地 区	学 校 名	職 名	氏 名
荒川区	第五中学校	教 諭	瓜 生 和 宏
足立区	新田中学校	教 諭	有 川 直 志
葛飾区	大道中学校	教 諭	大 村 志保子
立川市	立川第四中学校	主任教諭	◎難 波 裕 司
武蔵村山市	第一中学校	教 諭	北 原 みつき
武蔵村山市	第四中学校	教 諭	今 隆 史

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部義務教育指導課

指導主事 白川 智恵子

平成27年度
教育研究員研究報告書

中学校・特別活動

東京都教育委員会印刷物登録

〔平成27年度第197号〕

平成28年3月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 正和商事株式会社

リサイクル適性(B)

この印刷物は、板紙へ
リサイクルできます。